評論

内戦（ヴォローシン）

（翻訳）村野 克明
むらの かつあき

★以下（ ）内は訳者の追記。［ ］は原文の通り。

内戦（第一次大戦に続く数年間の旧ロシア帝国領土内で）

マクシミリアン・ヴォローシン（ロシアの詩人。内戦時クリミアに在住）

えっ、なんだって、どうしてロシア内部でドンパチドンパチ毎日血煙挙げてきたかって？そんなこと、君ならわかるだろ。だって、君のように心の底からヨーロッパの文化を愛していて、わがロシアの（第一次大戦での）勇猛果敢な同盟国とやらのイギリスとフランスの幸福を願ってやまない者なら、誰だって、そんなことは察しがつくってものじゃないかね［しかも昨日の敵ドイツは今日のわが友ってわけだし］。

そう、戦後のヨーロッパでは大量の弾丸、兵器と、軍服などの装具品が店ざらしになったんだが、数年もたてばどれもこれも値段がガタ落ちバカ落ちってことで、受け皿となるどでかい市場はどこなんだ、と目を皿にしないまでも、まさにロシアがでんと両手を広げてわが方へどうぞどうぞとやらかしていたのだ。で、ロシアちゅう国はそうした商品の手っ取り早い消費を保証してくれた。つまり、ロシア国内でドンパチとまたまた始まったってわけ。で、そうこうやってるうちには、自分らの領土は差し出すわ、帝国の権威は地に落とすわ、商業上の利権も食われるわ、で、いったい何をやっとるんだ、っていうと、ま、借金の返済のためにそうした生き恥を誠実に天下にさらしてきたのである。いやはや、こうなると（対ドイツ戦争の第一次大戦では一応「勝者」の側だったのだが）戦争の勝ち負けなんか関係ないわね。

いやいや、そればかりじゃあない。今度の大戦でドイツとイギリスとの間では、しまいまで言い尽くさなかったことがある、おしまいまでやり尽さなかったことがあった。それゆえに、すべてを、今度は舞台をロシアの国内戦線に移して、（代理戦争的に）やられてきたってわけだ。高度な文化を誇示するヨーロッパの国々の市民諸君よ、君らは俺たちロシア人の流した血のおかげで、平穏無事に呼吸をしておられるのですぞ。

［（第一次大戦のごとき）対外戦争と比べると今回の国内戦では誰もが「負けても負けの責めは負わない」というメリットが存在する。ここ数年のロシア国内でのドンパチではどちらが勝っても負けても、痛手を負うのはロシアばかり、ってわけだ。かくして、事

態はロシアの道徳文化をば、その高度な建設へと向かわせているのであります」。

だから、ってことだが、わがロシアが対外戦争を拒絶し、内戦へと舵を切ったのは正しいことだったのだ。だって、（第一次大戦と比べて）内戦のほうが、より系統的にロシア全土を戦場と化してくれたからね。より広汎に住民の心を捉えてくれたし、人間の「人となり」だって、がらりと、より深いところから一新してくださったってわけだ。おかげで、ロシアには素晴らしき土壌が整備されつつあるのだよ。わかるよね、死体という肥料をわんさとぶっかけて、よくかき、よくこね混ぜて耕してきたわが母なる偉大なる大地、のことだが。この豊かなわが土壌にこそ、これから先、ドイツが［イギリスだって］種を播くことになるだろうぜ。モンゴル［そしてジャパン］だって種播く人の側に馳せ参じるかもしれんぞ。わかったものじゃない。

いやいや、内戦がいったい何をロシアにもたらしたか、という点では、以上のいわば物質的優越性をめぐる話なんかは、じつは物の数でもないわね、その道徳的なメリットと比べたら、の話だけれども。［内戦の間、戦う双方は文化の領域でもお互いの「業績」という点では高潔に張り合ってきた。一方の側がその占領地で住民のライフスタイルと人間関係を「簡略（単純）化」するという事業で「一歩前進」したりすれば、すぐさま、その敵方でも、占領地の住民相手に、さらにその先を行くべく「前進」せんとあくせくとした。こんな競争が続き、これはもう習性と化し、急速に凝り固まってしまい、すでに生活の一部となったのである］。

のみならず、内戦はまた、人々の間に、真の兄弟愛を育てた、ともいえるね。ただし、もちろん、この言葉の一番古い意味でいうのだけど。旧約聖書に出て来るカインとアベルの兄弟愛、がそれだよ。ま、ロシアの内戦では「祖国愛」で兄弟が張り合った、ってわけだ。カインとアベルが「神への愛」で血を流したように、ね。そうしたなかで、内戦では、武器とスローガンとが、敵味方の当事者間で交換されたりもした。たとえば、こんなことがあった。

反軍国主義者は（しかるに）強大な軍隊を備えることに意を注ぎ、連邦主義者は（しかるに）「唯一不可分のロシアを！」というスローガンの権化となり、国際主義者は（しかるに）母国の擁護に病みつきとなり、君主主義者は（にもかかわらず）憲法制定会議を夢に見ており、愛国主義者は（にもかかわらず）祖国の不倶戴天の敵どもに対してわが国家を分割してくれたまえ、というアピールを出したりした。政府に仕える労働者は（ではあっても）ストライキを挙行した労働者を銃殺に処し、社会主義者は（ではあっても）官僚制度を復活させようとし、共産主義者は（ではあっても）ちっぽけな土地所有を保護し、地主らは（ではあっても）買い戻し金のない土地収用の法令化を図ろうとしたりした。

というわけで、ご覧の通り、どこの勢力も「本来の自己を犠牲にする」という点で張り合ってきたのだ。自己のもっとも大切なものを祖国に捧げた、ってわけだ。政治上の信念と政治上のプログラムのことだけれどもね。

言っとくがね、内戦に中立的立場なんてものはありっこないよ。もっと以前にあった幾つかの内戦の事例をみれば、このことは一目瞭然だろ。とはいっても、あとの時代に生をうけた俺たちのほうが、ま、「一歩前進」は果たしているがね。俺たちのドンパチのほうでは、道徳的原則が今じゃ立法の条項になっちまった、っていう「進歩」のことだけど。それって強制的な徴兵のことだよ。そのことは、ご存じのごとく、今回の内戦で、これは敵味方どっちにせよ、広々とした所で思う存分に実地に試してみたことなのである。

とにかく、内戦のカルチャー戦線でのこうした高潔な（「銃後」での）競争というものが、内戦のもつ一番の魅力的な側面でもある、とは言えるんじゃないかな。というのは、（以下、繰り返しになるけれど）内戦の間、戦う双方は文化の領域でもお互いの「業績」という点では気高く張り合ってきたからだ。一方の側が、その占領地で住民のライフスタ

イルと人間関係を「簡略（単純）化」するという事業で「一歩前進」したりすると、すぐさま、その敵方でも、占領地の住民に対して、さらにその先へと負けず劣らず「前進」しようとあくせくと働きかけたものだ。こんな競争が続き、こいつはもう習性と化し、急速に凝り固まってしまい、すでに生活の一部となった、ってわけだ。

いやはや、そうした特徴がとくに見られたのはどこか、という話となれば、それは、刑事訴訟と政治的プロセスの事件においてだ、と言えるね。非常時での裁判管轄権が確立すると、もう、疑わしき証人と弁護人の無駄話なんかはさっさとお払い箱となってしまう。犯罪人はじかに裁判官（の立場の者）とツラ付き合わされるのだ。その際には、裁判官は、効能書きのある興奮剤の助けを借りて、眼前の「ならず者」のことでは、何から何まで、けつの穴までも知り尽くすことができる。しかも、その際には、告訴人とは犯罪人自身のことなのだ。自分を告訴する者、自分との共謀者を告訴する者は唯一、その「自分」、つまり（「犯罪人」の）彼（彼女）自身なのだ。かくして、この場合、死刑とは（裁判官の立場の者にとっては）生き生きとした、誠心誠意の直感的行為の結果である。これはもうお役所仕事と死文化した法律とにぶら下がる機械的な付録のようなものだったかつての死刑からは、雲泥の差をつけた「進歩」、ってものだよ。

あのね、この内乱ってものだけれどね、これはね、国内での謀反事件を捜査する過程でだが、政治的に不穏な人物に関しては、深く鋭く、その人種的出自の問題がドッキングされてくるものなのだよ。こうなると、警察による捜査ってのは、民族的浄化の儀式みたいになっちまう。その結果、場合によっては、人質の死刑執行という慣行をも復活させたりしている。それを見ている市民は否が応でも「誰でもがすべてに罪がある」ことを思い知らされて、ぞっと身を縮めてもきたのだ。

それにしても、公開処刑の場で、死体にしかるべき名札を付けて路上にさらしものにしてみろよ、こいつこそは、疑いもなく、大いなる教育的意義がある、ってものだ。頭の中にヨーロッパ史のもっとも素晴らしき時代がよみがえってくること、間違いなしだ。だから、中等教育機関での実習に死刑を加えることには賛成せざるを得ない、ということだ。とくに女子教育の場ではそうだ。というのは、かつては非常時には学校当局はただただ強姦する（される）ことにのみ甘んじていたからだ。ただし、だからといって、死刑の権利までも、非常時のみに学校当局に委ねるというのは不当だろうよ。なぜというに、子供の精神を感化するところのこうしたラディカルな手段こそは、教師から奪われてはならないからだ。教師とは、我らが子供たちの精神的発達に対して、より大きな関心を抱いている人々だからである。

概して、社会正義の感情、人間的連帯の感情というものは、内戦の時代にこそ、深化するものだよね。それは、万人が次の「公理」を受容するところから生じるものだ。いわく「異を立てる奴バラは誰だって『祖国への裏切り者』であって、こいつこそ犯罪人だ」。

この論理的な帰結は具体的にはどうかって？ つい最近、すべての左翼政党によって採択されたばかりの次の宣言を見てみろよ。そこに結実しているよ。いわく「わが党よりも右側に位置する政党・会派とは、それがいかなるものであっても、合意に達してはならない」と。この宣言が「われらより左側の隣人たちとは、いかなる場合にも、合意してはならない」とする右翼諸党のしかるべき宣言によって補完される暁にこそ、ロシアの将来の国家的統一が確保される時節が到来したと見なされることだろうよ。

だけれども、内戦の影響ということになると、もっと実り多い分野があるぞ。ロシアの文学と芸術が、それなのだ。「言葉は銀、されど沈黙は金」とは万人の知るところ。現在の我々はロシア文学の「金（＝沈黙）の時代」に遭遇している。このことを否定する者はおそらく、いないだろうよ。詩人や作家ってのは大変な商売だね、現代では、万

事が彼らをして「周囲への怠りない注意」と「沈黙」とへと助長せしめているのだからな。そして、その「万事」ってやつのうちでの筆頭株は何かっていうと、そりゃ書籍出版の中止ってことだ（ああ、おまんまの食い上げだあー）。こいつはかなりメカニックな社会現象でもあるけれどね（印刷所が内戦でぶちこわされたりで）。いやいや、待てよ、もっと大切なことがある。道徳的な条件ってやつだ。すなわち、内戦が何を「簡略（単純）化」したかっていっても、何も人間関係の形態ばかりではなかったのさ。内戦は、さらに、人間の思考の形態と芸術の色調とに関しても、「簡略（単純）化」を果たしてしまったのだ。それは、次の次第だ。

ご存じの通り、今のロシアで一番人気の色彩は、これは「赤」と「白」だ。この二色を除くと、虹を構成するところの、その他の色彩のすべては「中立的」かつ「非公民的」なものとみなされている。なぜならば、「白」の立場からは、光のすべてのスペクトルが「赤」一色に見えるからであり、「赤」の立場では、これは、完璧に論理的かつ科学的に、スペクトルの色調のすべては「白」一色に収束する、との確信があるからだ。

かくして、共産主義（一九一七年の「十月革命」で政権奪取したロシア社会民主党ボリシェヴィキ）という赤色ヒドラ（怪蛇）VS反革命（アンチ「十月革命政権」諸党派）の白蛇、という素晴らしいテーマ（二大「蛇」合戦）のことなんかまるで歯牙にも欠けないような意固地な個人主義者（例えばおいら）にとっては、これは、ずいぶんリスクの大きな時代に直面して生かしてもらってきたわけだ。というのも、白系（軍）人は自分たちの面前に緑系人、黒系人（と、そしてたとえば上記の個人主義者など）が姿を見せても、すべて赤系（軍）人だと取り違えて平気の平左で銃をぶっぱなすからだ。その逆もまた真なりで、赤系（軍）人のほうは、その雑色性ゆえに、我にあらざればすべては白系（軍）人なり、と決めつける否や、こっちもドンパチドンパチとくる始末なのだ。

とはいってもね、へこたれることはないさ。そんな「赤」「白」両陣営の間に挟まって身動きできなくなったって、どうにか生き延びていく術はあるにはあるさ。どういうことかっていうと、たとえば「白系側から、こうこうこういうひどい迫害を受けてました」という申し開きを、新たにやってきた赤系陣営に対してすればよいのさ。これは（人々がその赤系レジームの下で生存するための）良き「推薦状」となるし、その逆もまた真なりだ。たとえば、自立した芸術家のことだが、旧ロシア帝国の個々の地域においては、白系及び赤系によるレジーム（統治形態）は周期的に、しょっちゅう交替したものだった。だから、こうした芸術家、ぶっちゃけて言えば内戦からの脱走兵なんだが、こうした連中は（例えばおいら）、自分たちの住むその同じ土地で、レジームの一つが終わり、新たに別のレジームが始まるたびに、「前のレジームではこれこれのひどい目に遭ってました」という（自分は怪しい者じゃありませんという）証言を求められたのだ。これが、新たなレジームに対する、自己がその統治下で生き延びるための「推薦状」となったのだ。まさにこの「推薦状」の確保こそは、前もって怠らず注意しなけりゃならんかったことなのだよ。

だが、もちろん、ロシアの詩人、美術家、作家とは、自らが生存するだけで事が足りる、ってなわけじゃあないさ。時には、ちまたで、市民の間、人と人との間で横行してきた「毒殺」行動からの解放の時間が訪れた際には、そのひと時をとらえて、自由な創作に打ち込むことだって、可能ではあったのだよ。だけども、もちろん、その時には「しーっ、しーっ、誰も見ちゃいないだろうな」、と用心しながら、ミューズの下で跪拝した、ってわけだったのさ。だがね、こんな聖なる時間は、とてもじゃないが、自立した芸術家が内戦のレジームに期待するようなものじゃないわさ。ないものねだりなんか、所詮はやらんほうが賢明ってものだよ。

（一九二〇年七月三日、擱筆）
（二〇一六年七月六日、訳了＝村野克明）